

第4回旧遷喬尋常小学校校舎整備・活用検討委員会会議概要

日 時 平成31年1月17日（木）午後3時

場 所 久世エスパスセンターギャラリー

出席者

委員) 岡山理科大学工学部建築学科教授 江面嗣人、美作大学生生活科学部食物学科教授 遠藤健治、まにワッシュョイ代表 岡本康治、真庭市立落合小学校校長 奥山仁、東京大学生産技術研究所教授 腰原幹雄、清水塾塾長 清水慎一、真庭観光局地域マネジメント部マネージャー 眞柴幸子、真庭市文化財保護審議会委員 森上知洋、シネマニワ代表 山崎樹一郎、岡山ヘリテージマネージャー機構美作地域会 山崎真由美、真庭市副市長 吉永忠洋
事務局) 生活環境部長 有元均、教育委員会教育次長 中谷由紀男、スポーツ・文化振興課長 大塚清文、生涯学習課長 武村良江、スポーツ・文化振興課参事 佐山宣夫、生涯学習課参事 森俊弘、スポーツ・文化振興課主幹 佐藤尚

大塚課長)

定刻となりましたので、ただいまから、第4回旧遷喬尋常小学校校舎整備・活用検討委員会を開会します。

本日は、井上委員が諸用により、ご欠席でございます。本日の出席委員11名で会議を開催させていただきます。

開会に先立ちまして、江面会長からご挨拶をいただきたいと思っております。それでは、会長よりよろしくお願いいたします。

江面会長)

皆さん、こんにちは。お集まりいただきまして、ありがとうございます。前回事務局がまとめたものがあるが、今日はそれを踏まえて、いろいろとご意見をいただきたいと思っている。

今日は、できるだけ、この場で発言していただいて、まとめていきたいと思う。ご発言いただけない先生方も、ぜひいろんな観点からご発言いただきたい。これからの文化行政は、観光と文化財という研修に参加した。

少し以前から、施策は上から降ってこない。昔は、国の施策は自分たちが決めるのだというスタンスだったが、徐々に行政は、どういう考え方を持って、文化財や観光を含めてやっていくのかというと、明確な考え方を問われる時代になりつつある。

今回の文化財保護法の改正についても、国が決めた文化財以外の文化財をいかに利用していくか。市町村の意見をまとめて、保存活用をしていくというような、少し前進したのかなと思う。ますます行政の手腕が必要とされる時代になる。今日もご意見をいただいて、真庭市に蓄積されて、さらに有効な文化財行政、特に今日の課題である旧遷喬尋常小学校の利活用に進んでいってくれたらと期待をしている。本日もご意見をいただきたい。

大塚課長)

これよりは、報告事項に入らせていただきます。進行を江面会長にお願いしたいと思います。

江面会長)

それでは、報告事項(1)の第3回検討委員会の会議概要について、事務局から説明をお願いしたい。

大塚課長)

(資料1により説明)

江面会長)

事務局から会議の要点の説明があったが、大きく4つあるが、何かご意見、付け加えたこと、書きぶりについてはいかがか。

委員)

(特に意見なし)

江面会長)

市民を巻き込んだ議論ということがある。具体的なやり方と、今後活用していく中でも、市民を基本にしたものにしていただきたい。

年に1回のイベントがあって、それで終わりではなくて、できる限り市民からの意見というものを得る形を作って、市民意識の把握、ワークショップ、いろんな講演会とかが必要なのかなと思う。

市民の中の価値について、修理などへの公費負担の納得性というのは、市民を巻き込んだ議論というのは、文化財の価値やあり方を市民にどのように伝えていくのか。

山崎樹委員)

資料の保存整備方針の最後に100年後とある。100年前からあった建物を、大金をかけて改築して、100年先を保存する。極めて大きな話で、それを考えさせられた。

時間を感じられる貴重な文化財。規模感というか、時間軸というか、100年前と100年先ということを考えての市民共通意識がとても大事だ。

方針自体も100年先を考えてやらないと、どうしてこんなことをしたのかと言われなように、100年先を見て掲げられたものに向かっていく、真庭市のイメージを市民大勢と共有できれば旧遷喬尋常小学校自身が、象徴的なものになるのであれば、意味がある。

江面会長)

山崎委員が言われたように、これをきっかけにして、市民を巻き込んでいろんな議論をしていく。教育の対象は市民であり、学生であり、それらの方をどのようにしていくか。文化財の修理をきっかけにして、100年先の文化財を考えると、文化財の本来の意味を考えるものにしてもらいたい。

人が何かを学んでいく、受け入れていくためには、何かの大きなきっかけがあると思う。今回の話し合いをきっかけにして、市民に文化財とは何なのか、文化とは何なのかということを考えるきっかけにしていただく。

それが明確になっていかないと、創造的活用に向かっていこうよという話であって、象徴的に100年先の文化財をどのようにして俎上に載せていくか。これは市民が生きていく上で何が重要かということにも関係してくる。

今回の整備・活用の中で修理に行き着くまでの話ではなくて、修理が終わってからも、旧遷喬尋常小学校をどう生かしていくかということに、つながっていくのだと思う。私は、教育的な意味があるのかなと思っている。遠藤先生に関連でご意見をいただきたい。

遠藤委員)

第3回のおきも、奥山副会長が、その点を強調されていて、私も共感している。ここにいくつか上がっているような学び舎だけではなくて、教育的な意味合い。もっと100年先の教育を見据えたような形があったら良いのではないかな。

話が違いますが、以前に京都府にしばらく居た時期があって、府立の京都学・歴史館という歴史博物館がある。そこに行けば京都の歴史がすべて分かる。一般の利用から研究者まで利用が多い。こういう形のもの良いなと思った。このような形のもので目指せば良いなと思う。

江面会長)

それでは時間もがあるので、次に進ませていただくが、他にはいかがか。

吉永委員)

行政側からも一言申し上げたい。我々もこの一年いろんなことを考えてきた。去年の4月、5月よりは随分と変わってきた。と言うのは、SDG'sにおいて、真庭市が全国10のモデルに入って、中山間地域では、全国で真庭市だけ。17のゴールがあって、それぞれ頑張らましようということだが、テーマを絞って、「子供たちの未来のために」という副題をつけている。

子供たちの未来のために、今できることは何かということがテーマ。その中で、まさに100年先の真庭はどうなのか、ということを考えなければならない。100年先に、この建物を生かすということは、100年間この建物を使うということだ。100年間使うということは、どうやって使うのか。

平田オリザ氏が来られて、サジェスチョンを与えていただいたが、東京が世界の中心ではない。世界の基準がどこかにある。

一委員として意見を言わせていただければ、真庭市民もどんどん減ってくるので、内向きの市民利用だけではなくて、真庭に世界中から人がやってきて、ここで交流をして、世界標準の子供たちが育つ、世界を知る、世界に出て行って、世界を連れて帰るとような使い方ができたらと思っている。

江面会長)

1つ重要な言葉で、「子供たちのために」があった。確実に我々には、次の世代を育てる責任があるので、大事なキーワードだ。グローバリズムと子供という観点からすると、次の世代をグローバル化するには、どうしたら良いのかという発想が出てくる。

いくつかの大事な言葉をお聞かせいただきたい。グローバリズムをだけではなくて、ナショナリズムの良さもある。

グローバルということを見ると、旧遷喬尋常小学校から発信していく。例えば、ヨーロッパだとか、同じような古い小学校を子供たちに見せる。

根底に教育というか、何かを育てていくことがあると、いろんな方面に何か広がっていくと思っているので、また、いろんなキーワードを聞かせてほしい。

他に何かあるでしょうか。よろしいか。

続いて、(2)アンケート結果についてで、旧遷喬尋常小学校の活用についてアンケートに回答をいただいた。それをまとめたものがある、いろんな傾向が見えてくるので、それも参考にさせていただいて、ご協議いただきたい。それでは、事務局から説明をお願いしたい。

佐山参事)

(資料2により説明)

江面会長)

事務局から、先般行われたマルシェにおいて、121人の回答者があって、アンケートの結果を報告いただいた。アンケートについて、何かご意見はいかがか。

山崎真委員)

ほしい機能というのは、これで全部か。他にもあるのか。

佐山参事)

アンケートの回答については、こちらで回答を用意して、○付けで回答していただいた。その他欄を設けて、自由に記載していただけるようにもしていたが、5件ほど記述の回答があった。

山崎真委員)

こういうふうに回答があると、私でもカフェになる。

江面会長)

確かに選択になると偏る。レストランとかもあるかもしれない。

その他はいかがか。入場料を払っても良いというのは、結構な数で了承をいただいている。それが明確にどういうために使われるのかが、きちっとしていると納得できる。昔聞いた話では、募金した70%が職員の給料に払われていた。何のために募金をしたのか分からなくなる。

山崎真委員)

入場料の件だが、他のことにも関わってくるが、入場料は払うには、何か中でできるか、ちゃんとした説明や、案内があった方が良い。

旧遷喬尋常小学校の歴史とか、真庭の歴史とかを展示している所がない。予約をして、ガイドを付けてもらえれば、案内をしてもらえる。入場料を取るのであれば、ちゃんとガイドを育成して、ボランティアではなく、バイト料なり払って、チームを作って、説明をしてもらって、それに見合う展示方法を考える。このような小学校があって良かったねというように納得をしてもらえる。

さらに、今は展示をしているだけで、ほとんど資料がない。有名な建築になると、本などを販売していることがあるので、興味がある人は買っている。これは、価値づけができていると納得してもらえるようなことが必要ではないか。

江面会長)

やはり、お金を払うということは、しっかりとしたものがないと、払っても良いかなということにならない。どこかの観光地では、1か所だけ入場料を取り、周辺の土産売り場や飲食店が潤っている。ほとんどの住民が重要文化財の中心的な建物に関わって生きている。そこで、観光と入場料ということで、清水委員に何か参考になることがあればお願いしたい。

清水委員)

一般的な意味合いで、入場料を取るか、取らないかはあまり意味がない。価値があるものがあるからと入場料をとるかということを考えても長続きはしない。

そういう意味で、アンケートの取り方も、どういう機能があったら、それなりにお金を払ってもよいかというように質問をしないと、建設的な回答にならないのではないかと思う。

今あちこちの文化財的な価値のある建物や、あるいは自然的な価値のあるものが、だんだんとお金を取ろうという議論になっている。どういった機能を付けることによって、価値を高められるのかという議論が背景にあるかと思う。価値を高めるということと、機能がセットにならなければならない。価値を高めるという議論が忘れられて、結果的にお金をとれば良いになり、安ければ良い、高ければ良い、というようになる。

何のために、カフェが必要なのか。それは、カフェに入ることによって、いろんな図書が置いてあって、ゆっくりコーヒーを飲みながら、いろんな本を読むことができる。大きな話と、機能ということがセットで、入場料を議論しなければならない。あちこちで十分議論がされていないなど感じる。

保全サイドの方だけが考えると、活用サイドの観光サイドの人だけが考えると、横断的な議論が行われなくて、それぞれが勝手に部分最適だけを狙って議論しているというように思っている。

江面会長)

ありがとうございます。非常に良いお話で、皆さんも納得できることが多々あったのではないのでしょうか。価値を高める、つまり対価を払って、何かを与えるということは必要なのだけれども、それだけではなくて、お金で文化財のために何ができるのか、どれぐらいプラスがあるか。

多くの議論が部分的に進められているというのは、まったくそのとおりだ。いろんな分野の方にご意見をいただいて、いろんな方面から検討をしていくことが必要だ。同時に、先ほどのご意見で、子供だけの内容ではなくて、それにグローバルという話に加わると、新たな課題というものが生まれてくる。そういう意見を専門の皆さんからいただけたら良いと思う。

他にあるでしょうか。

岡本委員)

このアンケートを取ったイベントは、先ほど2千人と言われたが、もっと来ているのではないかと思えるほど、賑わったイベントだった。マルシェとして活用されたが、いろんな地域から出店されて開催ができたという形であった。地域で活動している方が声掛けをして集まったメンバーだ。

そういうイベントが再々行われる場所になるのも良いなど、みんなで話をした。これであれば定期的に開催したいというようなイベントであった。来られている人も30代、40代の方が多かった。子供さん連れが多かったが、良い感じの空気が流れているイベントであった。

江面会長)

旧遷喬尋常小学校は、そのような役割を果たしている。マルシェだけではなく、今後も役割を拡大していく。使っていくことで、文化財は生きていく。観光が文化財を駄目にしていくような使い方はいけないが、観光を大いに利用して、来ていただく機会を増やす使い方は良い。悪い観光は困るが、明確にきちんとした使い方の観光は大いに利用すべきだと思っている。その他はよろしいでしょうか。

奥山委員)

清水先生が言われた価値を高めることが大事だなと思った。アイデア次第で、価値が上がる仕組みができることが分かった。ここも価値を高めれば、200円、300円、500円、1,000円と転がり込んでくるかもしれない。しかし、そこを目指すとは失敗するのだと思った。

納得して、入場料を自然に払っていただけるアイデアがいるのだろうと思っている。

札幌に視察に行ったが、豊平館の環境整備の素晴らしさ。その中の豊平館。この木造校舎も確かに素晴らしいのだが、環境整備になると、もう少し魅力的な、久世に行ってみたい、周辺に行ってみたいと思う仕掛けが、絶対にいるなと思った。

豊平館もそうだが、地下と公園と屋根裏をきちんと見せている。敷地内にある台湾フウのツリーライミングみたいに、あの上から木造校舎を見る。これはすごいと思う。上から見る、地下から見る、周りから見るといような視点があるのかなと思う。

副市長に教えていただきたいが、これには予算がいる。金をかければより良くなる可能性は高まる。金をかけなくても面白いことは、アイデア次第でできる。予算の保証というものはあるのか、今はいろんな方法で集める方法はある。予算を含めて見込みはあるのか、教えていただければありがたい。

江面会長)

それでは、吉永委員お願いします。

吉永委員)

出石に永楽館という芝居小屋があって、地元の方は、保存して博物館にしようと言ったそう。市側は、「嫌だ」と、「博物館を造るのにお金は出せない。芝居をするなら良いよ」と言ったそう。

しばらくして、芝居小屋として、復活をさせたそう。1万円の観客席がすぐに完売になるような盛況ぶり。本物をやらないと、何か、物を見せただけではなく、それが本物であるということが大切なのだと思う。

今やっているのは、ふるさと納税で、旧遷喬尋常小学校のためにということで集めている。今年から集めて3千万円ぐらい集まっている。市民や、市外皆さんからの浄財をいただいている。

江面会長)

明確な方針というか、市民が分かるというような状況を委員会からつくっていくか、それが大事である。先ほどの話で思ったのが、既存のものがあって、新しいやり方をどう認めていくか。それは奇抜なアイデアというだけではなくて、価値観が明確になっていないと、持続可能にならない。清水委員からあったように、何のためにしているのかという視点が大切ではないかと思う。

他には、よろしいか。何かありましたら、関連付けてご意見いただきたいと思う。先に進めさせていただく。資料の3で、事務局で、これまでの提言をまとめている。内容について、資料3で、第3回だけではなくて、基本理念とか、整理をしてまとめている。確認をしていただいて、ご意見をいただきたいと思う。事務局から説明をお願いしたい。

(大塚課長)

(資料3により説明)

江面会長)

これについては、今までのご意見をまとめたものである。事務局で活用事業について、具体的にまとめてくれている。1つ1つ議論をしていった方が良いのだが、本日の協議事項は8ページである。前回までのまとめについて、これに対して何かご意見がいただきたい。

清水委員)

観光庁と文化庁の議論に入ることがあるが、新潟県の津南町で縄文文化を自分のものとして、誇りある文化を財産として、それを後世にどのようなにつないでいくかという議論をやってきたばかりだ。基本は、保存と利活用はセットで考えなければいけない。保存は保存、利活用は利活用という考えが多すぎる。とりわけ、活用が先だという力が強い。

文化財を生かすことは、文化財を保存し、その価値をしっかりと認識して、高めていくということが、利活用だ。それが、持続可能な暮らしと、誇りある暮らしにつながるのだと、しっかり押さえないといけない。

地域の持続可能な暮らしと、誇りある暮らしということが、文化財の保存と利活用。裏腹の関係になっているということが、どこかに行ってしまう。観光で儲ければ良いのだと、しかし、受ける方はコストに見合わないことはやらない。極めて建設的ではない議論が、あちこちで行われている。そういう負を繰り返してはいけない。

まず、基本認識で、①市民・国民にとっての校舎の価値は、いわば、校舎を保存させる意義だと思う。校舎が存在することによって、新たな市民の活動や価値が生み出されるというのは、そのとおりだと思う。価値が生み出されることによって、持続可能な暮らしや、誇りある暮らしが、後世にまで受け継がれていくのだということを書きちゃんと書かないと、方向性が危うくなるのではないかと思う。

2番目は、基本的な考え方として、保全と利活用は対なのだ、まさに活用の活かすではなくて、ライブの生かすではないか。まさに命を吹き込むという、そういう意味での生かすなのだということのように、持っていけないといけない。

文化財保護が全国的なトレンドだというのは、国から与えられたものではなくて、地域が考えるものだよという趣旨からいっても、全国的トレンドとは関係ないのだと、あくまで個々として考えていくのだと、きちんと保全といわば、保護と利活用は対なのだ、生かしていくのだと、命を吹き込むのだということを書かれたら良いのではないか。

3番目は、言わずもがななので、市としてはちゃんと考えているということだと思うが、言わずもがなだ。

4番目、これが3番目だと思うが、市民の責務ということで、旧遷喬尋常小学校が、真庭市民の誇りの源泉として、価値を認識して、価値を高めていく必要があるのだということを書きちゃんと書いた方が良いと思う。それで、市民の覚悟というより、保存とか利活用は、市民が主体となってやるべき事がらなのだ、だれかの話ではないことをきちんと言うのがポイントだと思う。

基本認識のところは、ぜひ1つは、市民、国民にとっての校舎の価値というのは、どういう意義を持っているのかということを確認に言っていたらいいと思う。そういったことで、誇りある暮らし、持続可能な暮らしに繋げていくのだと、そこをぜひ言っていたらいい。

2番目は、そのための基本的な考え方として、保護と利活用は、対なのだ。いわば、命を吹き込んでいくことによって、繋いでいくのだということを書きちゃんと言っていたらいい。それで、命を吹き込むことが、責務なのだということを書いていただくことが、基本認識としては、良いのではないか。

基本理念も最後に、「市民の文化的向上及び文化財を活用した地域づくりに寄与する」ということだけではなくて、「市民の文化的向上及び文化財を活用した地域づくりに寄与することによって、100年も続く持続可能な暮らし」とか、市民が住み続けたい、誇りある暮らし

しに繋がっていくのだというところをきちんとうたっていないと、単に文化だけ大事にすれば良いのかという表面的な議論になってしまう。

基本認識と基本理念のところをきちんと検討委員会として出された方が良い。市民の意識醸成のためのワークショップの在り方とか、検討委員会の位置づけだとか、また時間があればお話をしたい。

江面会長)

ありがとうございました。1つは、基本認識として、市民・国民にとっての価値について、文化財保護は、全国的トレンドではなくて、個々として考えていくこと。市民がどのように関わっていくのか、この辺の考え方を明確にして、書いていくということだと思う。

提言の骨子について、まだ意見を言うようにしていないが、持続可能な暮らしとか、誇りある暮らしとか、そういうことに繋がっていくことが大事だということは言ってきたつもりであった。

そういうものが、保存と活用と、どうつながっていくのか、保存と活用をすることによって、市民の基本的な生きる力にどう繋がっていくのか。繋がっていくべきだ。清水委員の話で持続可能、誇りという言葉も出てきた。そういうものに明確に繋げていくのだということをお話いただいた。全体的な文書にしていく必要がある。そのときに確認をしていただきたい。

皆さんからも何かご意見をいただき、議論を深めていきたい。

山崎樹委員)

もやもやしているところを言っていたので、すっきりしている。そのときそのときのアイデアは、全く変わっていく。今は人が来るかもしれないが、100年先を考えると、そういうことではなくて、建物が存在するという時間の方が重要だと思う。

存在するという思考できる市民か、思考できる市民が保存をしているという象徴的なものであってほしい。観光とは直接的に結びつかないかもしれないが、やがて、それは重要な価値になるのではないかと思う。

江面会長)

他にご意見はあるか。

腰原委員)

少し疑問が出てきたのが、市民の財産として、市民が活用をしていくのか、市外の人に来て利用するのか、それは難しい話だ。先ほどの観光という話は、市の外にいる人達に来てもらう話なので、そのあたりが、今日はもやもやしているなど思う。

市民が日常的に、活用されないと維持できないのだとすると、外からの人達に期待をすることと、両立させるのは難しい。そのときに、どちらを目指そうとしているのかなという議論と、この文書も同じで、市民向けに何かをしようと、外から来る人に対して、あるいは海外から来る人に対して、どうしようという視点を考えないといけない。

だいたい観光地にしたがる。大金をかけるので、それを回収するには、外から人が来てくれて、お金を落としてくれないと困る。それは、反対で、地元の人達が普段から楽しめる場所にしていくべきだと思う。

そのときに観光の問題が大きく違うのは、ヨーロッパの人達が日本に来て観光をするやり方と、アジアの人達が日本に来て観光をするやり方と、国内の人が国内で観光をするやり方と、かなり違っている。

ヨーロッパ型の人達は文化が大事なので、この建物は何なのだと、だれが造ったのだとか、同じような建物が何なのだと、資料を読んでから建物を見たいとか、資料が全然ないと、何も分からないとなる。長期滞在型で、ゆっくり観れば良いと思っている人達だ。アジア型の人達は、そんな説明なんて面倒くさいので必要なくて、パッと見て、スタンプラリーみたいなものでいいやと思っている。

人との交流はあるが、お金の落としようがない。ビジョンとして、市民向けにどういうことをやっていくかという話と、外から来る人達に何をしてほしいのか、こんな人には来てほしくないぐらいのことから、整理をされてはどうか。

江面会長)

他にはよろしいか。

清水委員)

真庭の観光のあり方について、市民120人集まって、ワークショップを何十回かした。真庭の観光のあり方として、みんなで議論をしたのは、何のために観光をやっているのか。いろんな議論がある中で、お客様が来てくださることによって、元気だとか、お金だとか、いろんなものを地域に与えてくれる。

さらに言えば、お客様が良いなと言ってくださることで、地域の子供たちのアイデンティティとか、誇りが醸成される。お金が落ちることによって、なりわいになる。持続可能な暮らしとか、誇りある暮らしが維持できるのではないかということに至った。そういったことに資する観光をやっていくべきだ。

自分が儲かるためにやるのであれば、いくらやっても構わないのだけれども、税金を使うのであれば、市民の全体的な豊かな暮らしを追求していくことになって、結果的に農家の人達も、物づくりの人達も、いろんな人が関わるような、いろんな形態を作り上げて、お客様と共に、自分たちの暮らしを良くする。お客様と共に、暮らしをつくる。

いわば共創である。そういうところに持っていくべきではないか。まさにそういったものが、観光の語源だ。光を見せる、暮らしぶりを見せる、楽しませることなのだ。お客様が光を観る、暮らしぶりを楽しむことなのだ。それを我々は、「住んでよし、訪れてよし」と言っている。みんなでやって、単に行政がやる、既存の観光協会がやる、民間が勝手にやるではなくて、そういう横断的な主体として、真庭観光局をつくり上げて、みんなでやっていこうということにした。

結果的に、来訪者があることによって、泊まったり、飲食をしたりして、お金が落ちてくるので、しっかり工夫していかなければいけないのではないのか。

そんなことも含めて、観光のあり方を真庭は、十分議論をされている。この辺りをきちんと散りばめていかないと、今までの観光のワークショップはワークショップ、旧遷喬尋常小学校の議論は議論では、従前のバラバラの議論になってくる。ぜひ、観光のとらえ方をしっかりと散りばめていただきたいと思う。

江面会長)

ありがとうございます。観光について、話が出てきたが、ぜひ話しておかなければならない内容があればいただきたい。昔から文化財の在り方、活用の仕方は、観光という本来の言葉とあまり変わらないのではないかと思う。

清水委員が言われたように、観光という言葉は、明治の初めにつくられた言葉で、中国の書物「易経」から、「王たるものは、国の光を観る」そういう言葉から、王たる人間は、価値あるものを見抜いて、それをきちっと使っていくべきだというような話だと思う。

いずれにしても地域にあるもの、まさに文化財もその一つである。地域にある価値あるものを明確に見出して、それを地域の中に生かしていく。文化財という言葉も多くの人が錯覚をしているのは、指定文化財が文化財と思っている人がほとんどだ。

文化財保護法の規定から言うと、まったくそうではなくて、文化財というのは、指定だけではなくて、ちまたに価値あるものが多々あるので、見出していく。保護法の内容もそうになっている。それが、保存と活用が明確に整理をされて、きちとした形で、文化財の活用は何のために、明確に考えていかなければならない。

観光ということで、ある程度、議論がされていて、一定の理解が真庭の中であるのであれば、ぜひきちんと一度まとめていただいて、そこから文化財について、何ができるのか、文化財についても同じようなことがあると思う。こちらの考え方に利用していくことができると思うので、保存と活用の深みも出てくるし、それから市内と市外の観光客と市民の在り方は、共に創っていく、共創という言葉がある。

観光ということからも文化財の在り方が見えてくると思う。一度まとめていただいて、皆さんにご披露いただきたい。ぜひお願いしたい。

真柴委員は、観光について、ご意見をいただきたい。
真柴委員)

清水委員が3年間の議論をお伝えいただいたが、真庭市観光戦略策定を行った。平成29年度にきちとした書面で発表をしている。ぜひ次回の会議では、共有していただきたいと思う。先ほど清水委員が言われた内容も盛り込んでおり、「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりということで、4月から観光局がスタートしており、いろんな事業の精査をしながら、1年をもうすぐ迎えるが、この方向に向かって事業の展開を始めたところだ。

この旧遷喬尋常小学校の検討委員会の委員になり、同じようなことを考えているなど感じている。同じような方向を持って、取り組んでいけたらと思っている。観光とセットで考えていければと思っている。

江面会長)

ありがとうございます。かなり年月をかけて議論をしてきた中で、地元で担える人が育っている。今までの議論でも、主体者がだれになるのかということ。文化財の在り方、観光の在り方について、内発的な観光でなければならない。それを展開して、創造的な観光でなければならない。文化財の在り方として、主体はだれかということ。業者が入ってとか、観光客ということもあるが、最大の文化財の在り方を享受すべきは、主体となる住民である。

何のためにかと言うと、人のためだ。市民ということを確認意識していただいて、それが抜けてしまえば、観光も文化財も何もない。何のためかという目的を持っていただいて、そこにどれだけ焦点が当てられるか。ぜひ主体性ということも加味していただいて、保存、観光について、具体的にまとめていただければと思う。

他にご意見があるか。
岡本委員)

私達まにワッシュョイが、ここ何年か、一番、定期的に旧遷喬尋常小学校を活用していると思う。11月で、丸8年の給食の活動が終わった。4月からは9年目になる。メンバーの中では、少なくとも10年はやろうと話をしている。10年以降は、もう一回考えようとしている感じである。実際に10年以降も続けていこうと思ったら、どうやったらできるのか。

具体的に話が、全部が全部進んでいないが、まずは、作る場所とか、人の面では、今は調理室が無いので、お店の厨房で調理したものを、こちらに運んでいる。

やはり、近くに調理ができるスペースがあると助かる。これから先、保存事業ということで、改修工事に入るとなると、何年間かは活動ができないようなことになる。私たちが同じように活動を続けようと思うと、間が途切れると終わってしまうという話があった。

自分自身もできないだろうと思った。これから4、5年後に着手したとして、改修工事が5年かかるとしたら、10年先となると、メンバーも良い年齢になり、私も60歳ぐらいになる。この繋がりが途切れないように、改修ができたならというような希望を持っている。具体案を持ってはいないが、まったく別に場所ができたり、1教室分の食事ができるスペースができたりすれば、給食だけではなくて、お土産物やカフェといったものも運営ができるのではないかという話をメンバーでした。

観光でも、ここ3年ほど清水先生と楽しく議論をさせていただいた。真庭がすごく1つにまとまってきているという感じがしている。それぞれ9カ町村、新庄村も一緒に、それぞれが光っていたまちが1つになった。それぞれが光りながら、それでいて1つになれる。そういったものも、やっと見つけつつある。それをますます磨いて、私達の光を見に来てもらおうという流れになってきているので、協力体制ができてきていると思う。

江面会長)

ありがとうございます。最後のところの議論が時間をかけてしていきたいところだ。8ページの内容について、話をしたい。事務局から説明をお願いしたい。

大塚課長)

(資料3により説明)

江面会長)

事務局も来年度は、具体的に保存活用計画を練り上げていく。最終的に修理・整備をしていくので、空調設備とか、いろんなものが出てくる。何が必要というものも良いが、基本的にはどう使っていくのかということ、きちっとしておかないといけない。

市民の議論の仕方も、観光において3年もかけたということは素晴らしいことだと思う。ともすれば、1、2年でしゃんしゃんと終わってしまう会議もある。どうあるべきかという議論は、先ほどもあったように、最終的には市民の中に落とし込んでいくというか、行政の人も含まれるので、それがきちんと残っていくことが必要であって、それはまさに、教育的な作業である。

市町村に大きな課題となって大事になってくるのは、1つは、繰り返し同じような課題が出てくる。今回は、真庭市にとって観光という大きな課題があって、3年かけて結論を出していった。そのときの経験が役立って、市民の中にも何人が育っていることが大事であって、旧遷喬尋常小学校の活用も、ぜひそうあってほしいと思う。

興味があるのは、観光の方でどんな議論をしたのかということと、現実的にどのような活動というか、市民議論の方法と書いているが、市民が参加をして、どのようにしてきたのか、非常に興味があるので、ぜひお教えいただきたい。

もう1つは、昔は、空調など穴を開けることは敬遠されたが、今は問題ない。ただし、元に戻すことが条件である。活用の方法も、市民や真庭市から、ぜひこういうことがしたいのだというストーリーがあれば、認めていただくことができると思う。そのあたりの戦略、ストーリー化、そういうものが望まれる。講堂に空調が必要であれば、文化庁にぶつ

けていただくということで良いと思う。いろんな希望もあると思うので、ご意見をいただきたい。

真柴委員)

最初はメンバーも観光関係者だけではなく、建設業の方や、いろんな方に入っていたところから声かけを始めた。メンバーは、声かけよりも、入れてほしいという方が多かった。地域で活躍されている方が、「ワークショップが始まるよ。行ってみない」と声をかけてくださったと思う。

自然に異業種の皆さんが集まって、120人ぐらいになってしまっていて、どのようにワークショップを進めていこうかということから始まった。清水先生から最初に示していただいた道として、自分たちはどんなまちに住みたいのかと考えているということからスタートした。どうやって観光客を増やすか、ということをして、今度は商品づくりをどうやっていく、どんどん観光に寄っていくワークショップになっていった。

今、事業がスタートして動いているが、最初の原点に戻って考えましょうということ、清水先生から毎回教えてもらっている。それを参加していただいたワークショップのメンバー皆さんが共有をしてくださっていることが、非常に力になっている。取りまとめをリーダーの皆さんがしてくださっている。どんな姿の真庭に暮らしたいかということ、根底に思っているところがあって、それに向かって観光をやっているということ、いろいろな具体的なアイデアが進んでいる状況だ。

江面会長)

ありがとうございます。質問はいかがか。

山崎樹委員)

何に向かって進めているのか。

真柴委員)

「住んでよいまち、訪れてもよいまち」である。「住んでよし、訪れてよし」の真庭ということ。まず、住んでいる私たちが豊かな暮らしを見せるということ。

山崎樹委員)

見られるということで、こちらから光を創り出すわけではなくて、生活が文化であって、それを見に来る人がいるということ、旧遷喬尋常小学校の観光としての生活であったり、歴史であったり、営んできた暮らし・文化を見られたりするということで、ここを活用するという人の意識が、見せる上での活用ではやりたくないという思いがある。本当にそこでやるべきこと、やりたいことが、観光というだけではなくて、文化があつてのことではないか。

江面会長)

今回は、明確に旧遷喬尋常小学校というものがあるから、ここからどう発信できるかなと、観光もいろんな対象があるだろうから、その中心に学校がおけるということ。

吉永委員)

観光の話にどうしてもいくが、観光に地域づくりという言葉が後ろに付く。地域づくりという言葉は、地域づくりは人づくりであり、人に会いに来るという意味で、観光地域づくりという言葉とセットでご理解いただけたらと思う。魅力的な人がいっぱい住んでいる真庭に会いに行きたい。そんなまちのイメージだ。

江面会長)

ワークショップは何回ぐらい、どのぐらいの規模でやったのか。最終的には、観光が内発的というか、主体性を持ってやれるような形になるには、形を持っていないといけない。今までみたいに、バラバラの市民でやるのは、無理があつて、必要ごとに集めるまとめる機能が必要だ。結果として、観光局ができたというのをご紹介いただきたい。

真柴委員)

ワークショップの回数は、2か月に1回で、年間6回を2年間続けた。最終的に、この観光地域づくりを支援する組織が必要ということで、どういう組織であるべきか、そのようなことも議論しまして、今まで観光局の前身は、真庭観光連盟だが、観光事業者で組織されていた。やはり、観光地域づくりなので、農業や酪農や、さまざまな業種の方々に入ってもらっての組織にしようと、大きく役員の理事組織も変わらして、観光局という形で、この4月から立ち上がった。

江面会長)

それは、民間組織か、NPO法人か。

真柴委員)

一般社団法人だ。

江面会長)

新たに立ち上げることができたのか。

真柴委員)

そうだ。ワークショップに参加した120人は、ワークショップが終わったから終わりではなくて、120人の皆さんで、商品を売っていこうと、さまざまなプロジェクトの部会を作って、5つのグループに分かれて、それぞれが案を出し合つて、体験プログラムを作る部会、情報発信をしていく部会、部会に分かれて議論を進めている。

江面会長)

まさに、そのあたりも事務局で勉強をしてほしい。非常に参考になると思う。サステイナブルにしていく、それが具体的にどうなるのか。機能するようになっていないと、結局、みんなが元に戻ってしまうということではなくて、そこから新しい何かができる突破口というか、組織づくりは必要なのかなと思う。

今後、組織づくりの内容と、作り方、検討事項を含めて、参考にしていただきたい。いずれにしても文化財のフィールドが、学ばなければならない点がたくさんある。文化財の活用についてもしっかりとしたものにしていただきたい。もう少し時間があるので、ご意見をいただけないか。

森上委員)

100年後の市民に引き継ぐので、建物を100年後に見て、今と形が変わらないように改修をしていただきたい。

江面委員)

ありがとうございます。そのあたりは、しっかり指導すると思うし、活用等々の方向性が決まったら、構造補強、現状変更もある。現状をどのように変えていくのか、どこまで許容できるのか、という話を皆さんと議論をしていきたい。せっかく活用したけど、次の世代に渡すときには、ボロボロになって、何も残っていないとか、それでは困る。価値あるものを価値あるものとして、継承していくことが大事。ここはしっかり考えていきたい。文化庁も指導してくれると思う。

腰原委員)

100年後と言うときに、今回改修をする。その後のスケジュールでいくと、数年後にペンキの塗り替えとか、ワックスのメンテナンスはある。中規模な修理は、50年後にある。近代のものは、100年後にまたやらないといけない。そうすると、100年に1度の修理というイメージ。

期間の話とコストの話がある。次、工事を見られるのは、100年後だとすると、この建物がどのような建物であるかだとか、メンテナンスの仕方というのを目で見られるのは、100年後なので、今の世代の人たちも見られない。

ちゃんと工事の過程を見せるとか、この建物はどうなっているのか、どういうメンテナンスをすれば長く持つのか、ということを感じてもらえる機会でもあるわけなので、教育をしながら、あるいは活用しながら工事をしていきたいと思いますというのが、全国でも少しずつ出ている。

今回の工事が100年に1度ぐらいの工事で、これを見られる機会が非常に稀で、建物の模型があるが、きっと見られる時期がある。改修期間というのは、必ずしもマイナスではなくて、改修期間に、逆に人が増える。

錦帯橋の架け替え工事のときの方が、実は収入が上がって、むしろマメに架け替えた方が良いのではないかというような議論が出るくらいだ。使いにくくなるのは、マイナスかもしれないが、逆にそういうものが見える貴重な機会だという意識を持つのと、これが、この建物のこれからのメンテナンスをしてくれる人たちの興味の対象になる、教育の場だということ意識して、整備の方針を考えてほしい。

江面会長)

これは、絶対条件だ。文化庁時代は、採択して予算はつけるが、絶対に現場公開をしてくれと言っていた。以前は、現場公開はあまり議論されていなかったが、今は、現場公開はあたり前になっている。

修理プラス公開活用を。使いながらという論理も作れると思う。ぜひ、そういう形にしていていただきたい。工事中の現場公開をやらない所はない。そのときに見た子供たちは、次の修理のときとか、議員も見たのと、見ていないのでは大違いだ。議員は何でこんなにかかるのかと。見ると言わなくなる。ぜひ、公開はしていただきたい。

山崎樹委員)

工事期間の利用というのは、前回検討されて、来年度で決まってしまうのかなと不安である。改修しながらのスペースを利用し続けながら、やってきた団体は持続しながら、改修する。私はそうすべきだと思う。

江面会長)

前回の議論だけで、使いたいよねと。岡本委員が言われたように、次の世代に繋がらない。それは、文化庁に伝わらないと思うので、ぜひ文化庁に伝わるような話をしてもらいたい。文化庁の補助は65%（過疎地域）かな。半分以上を出してくれる。国民の税金を何とと思っているのだとなるので、戦略的な説明が必要だ。

清水委員)

はい。よろしいでしょうか。

江面会長)

はい。どうぞ。

清水委員)

ワークショップを通して、何を期待されるか。市内の知識を持っている人、あるいは関心を持っている人が集まることで、お互いの存在を知る。人の話をなかなか聞く機会がない。そういった意味で、地域満遍なく、できるだけ多くの方々に参加をしていただくと、その結果として、お互いに繋がっている。

自分が主体としての自覚、人を評論するのではなく、行政の悪いことを言うのでもない、だれかが悪いのではなく、自分がやらなければならない。という点が一番、ワークショップのポイントだ。

今回も最初からコンサルを入れて、たたき台を作ってもらうことはやめていただきたい。ワークショップの議論をあくせくしながら、たたき台を作っていくというやり方にしていきたい。

整理すると、1つは、価値そのものをどうやって維持保全をしていくのか。正に文化財の価値、真庭のアイデンティティの基盤として、真庭の誇りの基盤として、この場所を捉えて、みんなでどうやって価値そのものを保全していくのか。

これに必要なものはイニシャルコストだ。ここはある程度、専門家も含めて、議論をすれば、一定の考えが出てくる。バリアフリーをどうするか。これは、落ち着くところに落ち着く。

もう1つは、価値をどうやって高めるか、機能をどうするのかということ。これは、コストで言えば、ランニングコストになる。行政がずっと出し続けるのは、あり得ないと思っている。価値そのものを高めていくのだと。今日の議論でもあったように、何らかの活動をしていただくと、その活動の中に、来訪者が参画をしていく姿を作り上げるのが、一番良いと思う。

もちろん市民同士の活動もある、おじいちゃんと子供たちが集まって、おじいちゃんの昔の知恵を授けるというようなやり方もある。そこに来訪者が入ることによって、知恵が広がってくる。そこで、どういう活動をするのか、ということが分かる機能。言わば建築の技術の伝承かもしれない。物づくりの技術の伝承かもしれない。教育のやり方の見直し、伝承の場かもしれない。この時代はこうだった、今はこうだとかをきちんと比較、提示することによって、議論をする。

価値そのものをどうやって維持するか。言わばイニシャルコスト。価値そのものをどうやって高めていくか、これはランニングコスト。ここをしっかりと分けて、ぜひ議論をお願いしたい。整理をお願いしたい。そういう意味でも、ワークショップに取り組んでほしい。

来年度早々から価値とは何か、市民と共用していただいて、それをどうやって100年後に維持するか、どうやって高めていくかということで、議論して初めて、たたき台が出てくると思う。そのあたりの順番をよろしくお願いしたい。

江面会長)

はい。宿題をいただいたので、私もできる限りのことをしていきたい。時間がきてしまったので、閉会したい。他に、これだけは言っておきたいことがあればお願いしたい。

委員)

(意見なし)

江面会長)

これで、第4回目の検討委員会の協議事項が終わったので、事務局にマイクをお返しする。

大塚課長)

ありがとうございました。本日は、貴重な意見をいただきました。ワークショップのやり方であるとか、観光戦略の中でのお話であるとか、宿題もいただきましたので、次回に向けて、事務局でまとめていきたいと思えます。

有元部長)

構想委託は、まだ先と受けたまりましたが、我々が考えておりますのは、一定のレベルで、このような工事をしたら、何年ぐらいかかるというものがないと、尋ねられてもお答えすることができません。

今、考えているレベルは、こういう配置をするとか、こういう機能を持たすということではなく、期間とか、整備の方法、予算規模とか、組み合わせで、このパターンなら何年ぐらいかかる。そういうパターンをつくりたいので、これは進めさせていただきたいと思えます。次回の会議に資料として、提出させていただきたいと思えますので、ご了承いただきたい。

大塚課長)

それでは、次回第5回目ですが、来年度ということになりますが、5月30日(木)を予定しております。期間が長くなりますが、皆様のご予定をお願いいたします。

ほかにございませんでしたら、それでは、閉会へ移らせていただきます。閉会のごあいさつを奥山副会長よりお願いいたします。

奥山副会長)

第4回検討委員会お疲れさまでした。素晴らしい内容、濃い内容の話が今日の会議でできたと思えている。第1回を思い出すと、言いたい放題言って、何か雲を掴むような話から、具体的にイメージできた。会のお一人お一人の専門性を生かした活発なご意見をいただいた。

大切なキーワードをいくつか伺っている。「子供たちの未来のために」、「100年後の市民に引き継ぐ」、「保全と利活用をセットにすべき」、この会で何度も出た、「何のために」を繰り返し、繰り返し自問することが大事だという感想を持っている。

先日、中学校の同窓会を行った。乗り気でなかったが、参加すれば、滅茶苦茶楽しかった。市民を巻き込めば、いろんな意見が出ると思うが、それでもやりきることが大切だ。気が付くと、いろんな意見を言っていた人も良かったなと言うようになる。さすが真庭市だと言われるようになれば良いと思う。今後とも、この会への積極的な関わりをお願いしたい。本日はありがとうございました。

閉会 午後5時44分